现代日语主题句研究

陈访泽 著

大连理工大学出版社

现代日语主题句研究

（現代日本語の主題文の研究）

陈访泽　著

大连理工大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

现代日语主题句研究/陈访泽著.—大连:大连理工大学出版社,2000.10
ISBN 7-5611-1844-9

Ⅰ.现… Ⅱ.陈… Ⅲ.日语-句法-研究 Ⅳ.H364.3

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2000)第 88072 号

大连理工大学出版社出版发行
大连市凌水河　邮政编码　116024
电话:0411-4708842　传真:0411-4708898
E-mail:dutp@mail.dlptt.ln.cn
URL:http://www.dutp.com.cn
大连理工大学印刷厂印刷

开本:850×1168 毫米　1/32　字数:376 千字　印张:7.75
印数:1—3000 册
2000 年 10 月第 1 版　　2000 年 10 月第 1 次印刷

责任编辑:王佳玉　宋锦绣　　责任校对:金　禾
封面设计:金　中

定价:50.00 元

序

陳訪澤博士は篤学の士である。1993年4月に北海道大学大学院博士後期課程に入学し、縁有って筆者を指導教官としたが、元より専門も異なり、学習の企画進行は専ら自助努力に負ふところが大きかった。幸ひ当時は豊島正之助教授による日本語構文論を扱ふ演習等も開講されており、それ等の本学のカリキュラムの中で着実に学力を養はれた。その基礎の上に立ち、博士の学位請求論文を執筆し提出された。

本論文は現代日本語の名詞節主題文を構文論的に解明したものである。「AはBだ（である）」に於いてAを名詞とする主題構文の研究は従来も助詞「は」の研究に始まって盛んに行はれて来たが、本論文ではAの部分（主題）に「父の血を受け継いだのは姉のほうである」（阿刀田高『面影橋』）の如く、「従属節（連体修飾節）＋の」といふ名詞節を持つ構文を取り上げ、Bの部分（述部）はAの従属節の中の成分として分析できるので、この構文を「成分型関係名詞節主題文」と名づけ、「BがAだ（である）」（上記の例文では「姉のほうが父の血を受け継いだ」）といふ普通構文との対応を考察し、成分型関係名詞節主題文の統語構造、成立条件及び形成のメカニズム、更に此の構文に関はる諸問題の検討によって、主題構文に対する全面的分析・記述を目指してゐる。

本論文は何よりも、成分型関係名詞節主題文と名づけた構文の実用例を豊富に集めて、丹念に分析してゐることが特徴であ

り、多くの研究者より関心の有たれてゐる名詞節主題文を統一的に解明する手掛かりが得られてをり、関聯して得られた新見も少なくない。また、用例の収輯と共に非文の判定にアンケート調査を周到にしてゐる等の堅実な手法も評価し得るところである。

本論文は、英語のcleft“分裂”とも関聯し、また生成文法の深層構造·表層構造に基づく分析とも関聯しながら異なる立場であり、これ等の点に関して論文審査に当たり英語学·言語学の専門家により質問されてゐる。

以上により、1997年3月に北海道大学より博士（文学）の学位が授与された。願はくは、実用例に缺けるもののモデルとしては考へ得る構文の考察に及ぶ等、更なる解明の進展されんことを!

1997年3月

石塚　晴通
（北海道大学文学部言語情報学講座教授）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まえがき

本書は、1996年11月に日本国立北海道大学文学研究科に提出した「日本語名詞節主題文の研究——成分型関係名詞節主題文を中心に——」と題する文学博士学位請求論文に、若干の修正を加えたものである。

現代日本語の文法研究において、「は」という助詞のついた要素（つまり、主題）の由来について主に二つの考え方がある。一つはそれを生成文法で言う「深層構造」に存在するものと見る考え方で、一つはそれを「主題化」という文法操作によってもたらされたものと見る考え方である。前者の考え方は文の要素間の統語関係をはっきりと示すことができないのに対し、後者の考え方は文の構造の解明に非常に役立つものとして、すでに広く受け入れられるようになっている。しかし、後者の考え方は主題化のメカニズムに関して、少なくとも、二つの点においてまだ十分でないところがあるように思われる。一つは、今まで考えられている主題化操作は述部以外の要素に対して行うもので、述語を中心とする部分の主題化についてはあまり触れていないという点である。もう一つは、今までの主題化に関する解釈は一つの主題しか持たない文について考えたもので、二つ以上の主題を持つ文についてはほとんど視野に入れていないという点である。本書の研究は主に述語を中心とする部分（つまり、「の」による名詞節）の主題化について、その文の成立条件と、成立に対する制限条件の究明を試み、そして

二つ以上の主題を持つ文も視野に入れて、主題化のメカニズムを新たに考察したものである。

本稿がこんな形でまとめられたのは、ひとえに恩師の石塚晴通教授のご指導と励ましのおかげである。先生の心強い励ましのお言葉に支えられることがなければ、学位論文を書くことを最初から断念していたに違いない。ここに心からの感謝を捧げたい。論文の原稿段階で、葛西清蔵教授、宮澤俊雅教授、豊島正之助教授の諸先生方からも、いろいろと有益な助言と貴重なコメントをいただいた。この場を借りて、厚くお礼を申し上げたい。

また、私を日本語学の世界に案内してくださったのは、母校湖南大学の周炎輝教授である。修士課程時代から、一字一句をおろそかにしないという研究姿勢を身に仕込まれていたという気がする。周先生から直接に多くのことを学び得たことはこの上なく幸運なことだったと思う。

最後に、いろいろと有益な示唆をくださった同窓の福沢将樹、劉笑明、白井純の各氏を始め、論文の中に使用された用例のネイティブチェックを協力してくださった石塚ゼミの方々、北海道大学中文研究室の方々、北海学園大学中国語勉強会の方々にも感謝したい。

出版に際して、大連理工大学出版社及び王佳玉、宋錦綉両氏にひとかたならぬお世話になった。記してお礼を申し上げる次第である。

陳訪澤

2000 年 9 月

［著者紹介］

陳訪澤(Chen Fangze)

●1956年に中国・蘇州市生まれ。

●1982年1月中国・山東大学外国文学部日本語科卒業。

●1984年4月中国・湖南大学大学院修士課程修了、同大学日本語講師。

●1987年7月米国・国立Auburn大学客員研究員。

●1989年7月中国・広州対外貿易大学日本語講師。

●1997年3月日本・北海道大学文学研究科博士課程修了、文学博士学位取得。

●現在、中国・広東外語外貿大学東方言語文化学院助教授。

［主要論文］

1.「魚は鯛がいい」構文の分析,『世界の日本語教育』第4号,日本・国際交流基金(1994年)

2. 日本語の分裂文とウナギ文の形成について,『世界の日本語教育』第7号,日本・国際交流基金(1997年)

3. 論日語句子中両個方面与両種関係,『日語学習与研究』1998年2期,中国・対外経済貿易大学(1998年)

4. 日本語の分裂文の成立から見た格成分の類型,『中国日語教学研究文集8——21世紀的日語教育』,中国・大連理工大学出版社(1999年)

5. 日語分裂句的成立与非格成分,『現代外語』2000年2期,中国・広東外語外貿大学(2000年)

目　次

序　石塚晴通 …… I
まえがき …… III

第1章　序　論 …… 1
1. 研究のテーマ …… 1
2. 研究史の概観 …… 4
3. 本論文の構想 …… 6
4. 研究の立場と方法 …… 12
5. 本論文の構成 …… 14
第1章注 …… 15

第2章　成分型関係名詞節主題文とその周辺 …… 18
1.はじめに …… 18
2. 名詞節主題文の分類 …… 18
3. 成分型関係名詞節主題文 …… 20
4. 用言型関係名詞節主題文 …… 28
5. 名詞型同格名詞節主題文 …… 31
6. 用言型同格名詞節主題文 …… 34
7. 不完全型の成分型関係名詞節主題文 …… 40
8. 形式名詞「の」について …… 43
9.おわりに …… 46
第2章注 …… 47

第3章　格成分型 …… 50
1.はじめに …… 50
2. 各種の格成分型 …… 50
3. 格助詞の無形化と格成分の類型 …… 66
4. 格助詞の無形化に影響する要因 …… 72
5.おわりに …… 75
第3章注 …… 76

第4章　非格成分型 …… 79
1.はじめに …… 79
2. 非格名詞型 …… 79
3. 副詞型 …… 84
4. 副詞節型 …… 87
5. 形容詞型 …… 91
6. 連用修飾語の種類 …… 96
7. 非格成分型の性格 …… 100
8.おわりに …… 103
第4章注 …… 104

第5章　間接成分型 …… 107
1.はじめに …… 107
2.ノ格名詞型 …… 107
3. 被修飾名詞型 …… 128
4. 内包節成分型 …… 140
5.おわりに …… 149
第5章注 …… 150

第6章　二項目成分型 …… 152

1.はじめに…… 152
2.「Y＋Z＋X」構造型…… 152
3.「ZノY＋X」構造型…… 159
4.「YガZデX」構造型…… 162
5.二項目成分型と一項目成分型の関係 …… 169
6.おわりに…… 180
第6章注…… 181

第7章　成分型関係名詞節主題文の形成…… 183
1.はじめに…… 183
2.従来の解釈とその問題点 …… 183
3.新しい提案 …… 188
4.成分型ノガ構文と総記性の「が」 …… 199
5.いわゆるウナギ文の形成について…… 205
6.おわりに…… 210
第7章注…… 211

第8章　結　語…… 215
1.本論文の総括 …… 215
2.今後の課題 …… 216

索　引…… 224

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第1章　序　論

1. 研究のテーマ

現代日本語の主題構文についての研究は「は」という助詞の研究に始まったもので、今まで多くの学者によって盛んに行われてきた。これらの研究によって、主題構文の姿は次第に明らかになりつつある。しかし、今までの研究は「名詞＋は」という主題を持つ名詞主題文が中心であった。名詞主題文は主題構文の主流タイプなので、その研究は主題構文を解明するのに極めて重要であるということは言うまでもないが、主題構文をより全面的に認識・解明するためには、その他のタイプについての研究も必要不可欠である。本論文は、主題構文のうちの、主題の部分に「従属節（連体修飾節）＋の（形式名詞）」という名詞節を持つ、すなわち「名詞節＋は」という主題を持つ「の」による名詞節主題文（以下、単に「名詞節主題文」と呼ぶ）について検討するが、とくに次のようなタイプを中心テーマとして取り上げる。

(1) a　父の血を受け継いだのは姉のほうである。（阿刀田高『面影橋』）

b　彼が書いているのは軽妙なユーモア小説だ。（森瑶子『砂の家』）

c　電話が通じたのは十分後である。（吉行淳之介『美少女』）

d 近代自然科学が成功したのは自然と人間とを分離したからである。(集英社『宇宙・地球アトラス』)

このタイプの文において、述部の要素は主題の従属節の中の成分として分析することができるので、本論文ではこの特徴から、このタイプの文を「成分型関係名詞節主題文」と呼ぶことにする。[1)]

成分型関係名詞節主題文は、述部の要素が名詞である場合形態的に「～のは～だ」になるため、コピュラ文の一種とも見なされている。このタイプの文の特徴としてよく挙げられているのは、(A)「は」によって示されている部分は前提(presupposition)を表す主題であり、主題以外の部分は述部で、新情報を担う焦点(focus)である、(B)述部の要素は主題の従属節の中の要素と統語上の関係を持っている、(C)必ず内容的に対応する普通構文がある、[2)]といった点である。例えば、上記の(1)の文において、「～のは」の部分は前提を表す主題であり、「～だ(である)」の部分は焦点となる述部である。述部の要素は主題の従属節の中で、それぞれ、(1a)では動作主の「姉のほうが」として、(1b)では対象の「軽妙なユーモア小説を」として、(1c)では時間の「十分後」として、(1d)では原因の「自然と人間とを分離したから」として機能することができるので、内容的に次の(2)の普通構文と対応していると言える。

(2) a 姉のほうが父の血を受け継いだ。

b 彼は軽妙なユーモア小説を書いている。

c 十分後、電話が通じた。

d 自然と人間とを分離したから、近代自然科学は成功した。

成分型関係名詞節主題文と普通構文のこのような内容的な対応を考察し、成分型関係名詞節主題文の統語構造、成立条件および形成のメカニズム、さらにこのタイプの文に関わる諸問題を

検討することによって、主題構文に対するより全面的な分析・記述を提供し、主題構文の研究に少しでも貢献しようというのが本論文の目的である。

本論文では、次のような文を成分型関係名詞節主題文として扱わない。

(3) a　俺の知ってることはそれだけだ。(大薮春彦『名のない男』)

b　彼の視野の中で動くものは先刻の男の後ろ姿だけだった。)(夏樹静子『目撃』)

c　目覚めたときは午後の五時頃であった。(大薮春彦『名のない男』)

d　私たちが住んでいたところは京都の北の方だった。(奥津 1974)

これらの文において、述部の要素は主題の従属節の中の要素と統語上の関係があり、内容的にも次の文と対応する部分があるので、(1) の文と極めて似ている。

(4) a　俺はそれだけを知ってる。

b　先刻の男の後ろ姿だけが彼の視野の中で動く。

c　午後の五時頃、目覚めた。

d　私たちは京都の北の方に住んでいた。

しかし、主題の従属節の被修飾名詞を見ると、(1) では何の意味も持たない形式名詞の「の」であるのに対して、(3) では実質的な意味を持つ「こと」「もの」「とき」「ところ」などの名詞である。すなわち、(3) の文は名詞主題文であるため、本論文ではこのような文を考察の対象から除外する。[3)]

なお、形態的に成分型関係名詞節主題文と対応していて、成分型関係名詞節主題文の主題に相当する部分に「は」ではなく、「が」が現れるような文もある。

(5) a　いち早く葉を黄色に変えるのがキハダの木です。

(1993.11.27『北海道新聞日刊』)

b 最初に言ったのがその言葉だった。(松本清張『山峡の章』)

c 久子が新橋にコーヒー・ショップを開いたのが六年前。(阿刀田高『面影橋』)

このような文はノガ構文の一種で、「ダ」の前に来る要素は「～のが」の部分の従属節の中の成分として分析することができるので、この特徴からこれを「成分型ノガ構文」と呼ぶことができるが、本論文のテーマとなる文と違うタイプのものなので、基本的には取り扱わない。しかし、この構文は主題構文と関わりがあるので、第7章4節で主題構文との関係について考えてみることにする。

2. 研究史の概観

具体的な内容は関係の各章で述べることにするが、ここでは全般的な流れについて概観する。

成分型関係名詞節主題文についての研究は他の主題構文に比べて盛んではないが、今まで主に二つの流れがあるように思われる。一つはこのタイプの文を「分裂文」または「疑似分裂文」と呼んで、生成文法の影響を受けて始まったものである。最初にこれを取り扱ったものにはNakau (1973: 60～69) がある。この研究では、「分裂文」への変換を変形操作の一つとして捉え、英語の分裂文と疑似分裂文と対照しながら、日本語の「分裂文」の構造と格成分の格助詞の「削除」について検討している。この流れに沿ったものとして、Muraki (1974: 41～59) では、前提と焦点の視点から主題化と「疑似分裂文変形」について別々の操作を提案しており、井上 (1978: 21～24, 99～102) では日本語の「疑似分裂文」の「派生」について二つの提案を紹介している。渡部 (1979) では、格成分の「転出」

の可能性と格助詞の「削除」、そして「分裂文」の「派生」について検討している。これらの研究はいずれも作例を中心としたもので、実際のデータを提示していないため、日本語の成分型関係名詞節主題文の全体像を明らかにしたとは言えないが、このテーマの基本的な研究課題を示したものとして注目される。

もう一つの流れは成分型関係名詞節主題文をコピュラ文として、主に「は」と「が」の問題を中心に取り扱ったものである。この流れの発端は三上（1953）におけるコピュラ文の「措定」と「指定」の区別で、これを受け継いだものに西山(1985)、上林（1988)、熊本（1989b)、西山（1990a）などがある。これらの研究は成分型関係名詞節主題文を独立のテーマとして取り扱ったものではなく、コピュラ文の一種である「倒置指定文」として、文の意味と、文における「は」と「が」の使い分けについて考察したものである。このような研究はこのタイプの文をもう一つの視点から捉えるものとして、極めて重要な意義を持つと思うが、上林（1988）のように、この点を強調して成分型関係名詞節主題文と普通構文と関連（つまり、普通構文形式の構造から成分型関係名詞節主題文を形成する可能性）を否定しようとする立場は適当なものとは思われない。

以上のほかに、奥津（1978)、富田（1980)、奥津（1981)、北原（1981：283～308)、近藤（1988)、野田（1994)、菊地(1995a)、菊地（1995b）などのように、他のテーマとの関連で「分裂文」または「疑似分裂文」に触れた研究もあるし、佐藤(1981)、熊本（1989a）のように、談話の機能から日本語と英語の「分裂文」を比較した研究もある。また、砂川（1995）のように、実際のデータによる統計学的な研究も出ている。しかし、これらの研究は、いずれも成分型関係名詞節主題文について、部分的に、または側面的にしか検討していないため、成分

型関係名詞節主題文にはまだ明らかにされていない点が多く残されていると言わなければならない。

3. 本論文の構想

議論を展開する前に、まず成分型関係名詞節主題文を含む主題構文全体の成立に関する本論文の構想を、概略的に述べておきたいと思う。この構想には二つのポイントが含まれている。

一つは、文における二つの側面の区別ということである。日本語の文は、文を構成する二つの側面として、よく文の素材的内容を表す部分と話手の態度を表す部分とを区別されてきた。例えば、初期のものには時枝誠記氏の「詞」と「辞」の概念、[4]三上章氏の「コト」と「ムード」の概念、[5]渡辺実氏の「叙述内容」と「陳述」の概念などがあり、[6]近年のものとしては、益岡隆志氏の「命題」と「モダリティ」の概念がある。[7]概念の名称こそ違っているものの、区別された内容は本質的に一致していると言ってよい。

この二つの側面を区別する考え方、すなわち、文の基本的な成り立ちを素材的内容の側面と話手の態度の側面の結合において捉えようとする考え方は、日本語の文法研究の中で極めて有力なものになっている。このような視点は日本語の文の分析に有効なもので、主題構文の分析にももちろん役立つものである。本論文もこの視点から出発するが、ここで導入される「基本概念構造」という用語について少し説明を加えておく。例えば、次のような素材的内容について、これを表出する前には文ではないので、どんな形をしているのか想像するしかない。

(6)　　花子ガ本ヲ読ンデイル

しかし、この内容を正しい文として表出するためには、少なくとも、表出する直前の段階において、その構成要素である「花子」は「読ンデイル」という動作の「動作主」として、「本」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com